

西日本における山城築城に関する史料

福岡大学名誉教授 小田富士雄氏



小田富士雄（おだ・ふじお）

昭和32年九州大学文学部史学科卒業。同年同大学大学院文学研究科進学、昭和35年9月同大学大学院文学研究科史学専攻博士課程を経て同年10月から同大学文学部助手。昭和46年別府大学助教授。昭和50年北九州市立歴史博物館に勤務。昭和58年から同博物館長。昭和63年福岡大学人文学部教授。平成16年から現職。文学博士。

主な著書・論文は『九州考古学研究・歴史時代編』『九州考古学研究・古墳時代編』『九州考古学研究・弥生時代編』（学生社）、『北九州瀬戸内の古代山城』『西日本古代山城の研究』（名著出版）など多数。

1 はじめに

私は「北部九州の古代山城について」というテーマでお話しします。これまでもよく言われているように、神籠石と言われるような文献に名前の出てこないようなもの、それから六六〇年代に『日本書紀』などに名前の出てくる、いわゆる朝鮮式山城といわれるようなものは、現在分かっているものだけでも十五カ所くらいあります。そのうち、ここ五、六年来発掘調査などを進めている六つの山城について、西日本の古代山城が造られたきっかけとか、あるいは古代山城の性格という問題にも若干ふれてみたいと思います。

2 古代山城に関する近年の発掘調査の成果

現在、西日本地方では神籠石あるいは朝鮮式山城などの調査が例年行われており、古代山城ブームのような感じになっています。鞠智城もそういう流れのなかに入っており、いずれも最近になり整備を中心にした仕事が一斉に始まっています。

(1) 御所ヶ谷神籠石（福岡県行橋市）

写真①は、明治時代からよく知られている行橋市の御所ヶ谷神籠石の中門です。これもこの五、六年調査をしています。これは初めてきれいに掃除した状態です。二段式の築造になっており、下側に基壇となる部分の石組みがあり、この部分に通水溝が通っています。この通水溝は石垣の面よりもやや外に出ているのが一つの特徴です。その上に少し控えて高い石垣を築いていますが、これに使っている石はほとんど切り石に近いようなもので、なかには鉤型かぎに削つてうまく合わせたようなものもあります。全体に石の上下方向に目地があり、ちょうど重箱を積み重ねたような石積み部分です。それから一部、奥のほうに互い違いの石積みがあります。そういういろいろな状況が分かってきています。



① 御所ヶ谷神籠石 中門



② 版築と列石



③ 第二東門

当然、この地域の七世紀代に出てくる終末期古墳の石組みとの比較もされてきたわけです。

写真②は、北側のほうの神籠石の部分です。これで見ると従来列石があるようなところでは、列石の上に土塁がのっており、これにいわゆる版築構造が出ています。最初はもともと版築が続いた状態がちょうど列石を埋め殺し状態にしてその中に入れて築いているわけです。それを後ろにまたずっと直線的に切って仕上げるわけですが、その段階ではこの神籠石の列石はまだ版築の中に入っているという状態が確認されました。その外側に、これを築く時の足がかりになる木柱の跡などが残っています。

写真③は、今の列石から東回りに回って行くと中腹くらいにある第二東門というところです。この部分は壊れかけており、まだ調査中ですが柱穴の痕を精査する必要があります。この部分から七世紀後半から末ぐらいの須恵器が出て、この神籠石は明らかに朝鮮式山城ができた六六〇年以降も機能しているということが分かってきました。

写真④は、第二東門から出た須恵器です。最初の調査の時には肩の部分までしかなかったのですが、その後調査を続け、胴部までくっつく部分が出てきました。



④ 第二東門出土の須恵器

(2) 鹿毛馬神籠石^{かけのうま}（福岡県嘉穂郡^{かいた}瀬田町）

写真⑤は、鹿毛馬神籠石^{かけのうま}石といって嘉穂郡瀬田町にあります。これも早くから知られていたもので非常に低い位置にあります。この向こうに鹿毛馬川が流れています。その前面がずっと広い谷になっており、水田の部分を堰き止めるように列石があります。列石の前面がちょうど写真の部分になります。その後ろ側を発掘してみたら、この部分から通水溝がずっと抜けている状態が出てきました。それからこの部分に木柱が残っていることが分かりました。同じように外側にもあり、だいたい三メートル間隔で外側の部分、内側の部分に木柱が立っていたようです。

写真⑥が列石の内部にある木柱です。現在は三メートルくらいありますが、ちょうどこの部分に柱



⑤ 鹿毛馬神籠石 水門



⑥ 列石内部にある木柱



⑦ 木柱の痕跡

の下の部分が出てきました。きれいに柱の面取りをしています。びっしりと細かい版築をしてその中に立っていますので、最初から柱を立てて次々に版築をしていきながら柱をそのまま埋めていったわけです。おそらくこの上は、さらに三、四メートルあるものだろうと思いますから、大木を一本取ってきて表面の面取りをしたものを三メートルごとに立てていったのでしょう。柱の大きさや面取りした形状は、大宰府の水城から出てきたものと非常に似ています。写真⑦は、列石の前面にある三メートル間隔の木柱の痕跡です。

(3) 唐原神籠石 (福岡県築上郡大平村)

写真⑧は現在調査中の築上郡大平村の唐原神籠石。新しく発見された神籠石で、その水門の調査状況です。これまでの神籠石と違い、一つの列石が二倍くらいの長さがあります。ここで面白いのは落とし込み式の列石があることです。これなども特に九州よりも近畿寄りの地域の終末期古墳に出てくる一つの工法です。

写真⑨は今の列石の内側、すぐ後ろから出てきた通水溝です。写真⑩は先年調査した別の谷の通水溝です。こちらは完全な切り石まではいかないのですが、花崗岩で下にきれいに石を敷いており、その上に両方に石を立ててその上に天井石を被せ、九メートルほどの長さにわたって後ろのほうから外に通水溝を設けている状況です。

写真⑪は、写真ではよく分からないですが、第3水門のすぐ上に礎石建ちの建物があり、これがいつの時期かというのが問題になります。七世紀の初めぐらいだろうともいわれたのですが、これまで

の山城ではそんな段階までこの礎石建ちの建物はありませんので、あるいは礎石建ちの建物は当初のものではなくて再建時のものではないかと思われます。礎石の間を抜いてもらったら、やはりそれ以前に掘立柱の建物があったことが分かったのです。

(4) 宮地岳山城（福岡県筑紫野市）

写真⑫は最近、大宰府のずっと東側で発見された筑紫野市の宮地岳山城です。この場合には下に地覆石を並べておいて、それより少し内側に入れたところから列石を積み上げてくるという工法がふつうのようです。石が従来の神籠石に比べると小さいようです。

写真⑬は一昨年でしたか、発見されたものです。列石や土塁などをたどって上のほうに行くと、見事な切り石に近いような石垣が残っていました。これも実はどういうわけか、つい最近までこういう石垣の存在が知られていませんでした。今後、大野城や土塁がある大宰府の条坊制などとかかわりがあるのかどうか論議的になってこようかと思っています。

(5) 大野城（福岡県太宰府市）

写真⑭。これからは朝鮮式山城といわれる記録に残っているものです。これは大野城の大宰府のほうから上がってきたところにあります。大宰府口ですね。礎石をこのように据えたのは二回目の時期で七世紀の終わるか八世紀の初めぐらいだと思います。礎石を据えて瓦を使った城門を造ります。これが最初の時の石垣の面で、さらに二回目の礎石を使った時にはこの部分に石垣を付け足して埋めて



⑪ 建物跡



⑧ 唐原神籠石 第1水門



⑫ 宮地岳山城 列石



⑨ 第1水門 通水溝



⑬ 第3水門



⑩ 第3水門 通水溝

(⑧～⑪ 唐原神籠石、⑫ ⑬ 宮地岳山城)

いくのです。

写真⑮。今の列石の上のほうをたどっていくと土塁の上に柵列、木柱をずっと立て並べて柵を設けていた状態がはっきりしてきました。これは鞠智城の北西側で昨年来発見されているものと比較するのに良い資料ではないかと思っています。

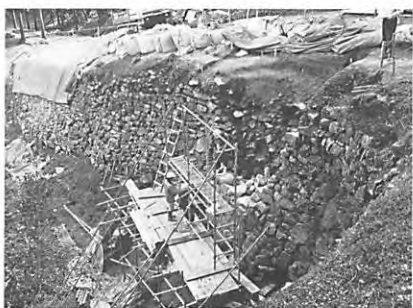
写真⑯は現在整備中の北側の百間石垣と呼ばれるところです。昨年の夏の水害で四王寺山では百カ所以上土砂崩れなどが発生して、この場合も上のほうから崩れて根こそぎ上のほうが持っていきました。その結果、本来の構築状態が非常にはっきりしてきました。谷の部分にガラガラと石、岩石を突っ込んでその上に多少砂などを被せて石垣を築いている。ところどころは石垣を積みながら背後には岩壁がずっと露出していますが、その岸壁を削って長い石を使ってそこに引っ掛けていくという形



⑭ 大野城 大宰府口城門



⑮ 土塁上の柵列



⑯ 整備中の百間石垣

で積み上げていくという技法がはっきりしました。こういう大水害では遺跡が崩れると被害もありますが、一気に構造が分かってくることもあります。

(6) 金田城^{かなだ}（長崎県対馬市）

写真⑰は一昨年、対馬の金田城で新たに発掘した二の城戸と呼ばれる門です。内側から見たところ。柱が立って、城門の回転柱の穴がありますから左右観音開きになります、ここは二間になっています。実はもう一つ、この下の階段部分にも礎石があり、三間×一間になるようです。実は礎石の列が全部同一レベルで、一つだけ前のほうが一段下がるので、私は最初庇かと思ったわけですが、その後、昨年の調査で南門が新たに発見されて、それを見ると各階段ごとに段々に礎石が据えられていて、おそらく上のほうの屋根で高さをそろえるという仕組みになるようです。

写真⑱。今の所からずつと下がると、東南の隅の部分に出っ張りがあります。ここは四隅すべてに出っ張りがあり、新羅の山城などでも時々見られることが分かってきました。このあたりは石垣をきれいに築いている様子が残っており、左から伸びていき南門につながっていきます。

写真⑲が昨年新たに発掘した南門です。従来は一の城戸から三の城戸までといわれていましたが、先ほどの石垣の線をたどっていくと切れたところがあり、そこを上から詳細に見ていたらどうも門がありそうだと。発掘したら、やはりこのように出てきました。この場合は階段が三段で、それぞれに礎石が据えられています。階段式に礎石が据えてあるわけです。そして、ここに（スライド中央付近、内側ホゾ穴）門の開閉口があります。内側に一間と外側、階段下に一間。内側の一間はこの面



⑳ ピングシ門 整備された礎石



㉑ 金田城 二の城戸



㉒ 東南部の張り出し



㉓ 南門

（中央段）より一段上がると、ここ（中央段）の階段が一番奥行きが広くなり、門を内側に開閉する関係でこの部分の奥行きが非常に広いことが分かってきました。

写真②は現在整備中ですが、金田城からちよつと上がったところにビングシ山というところがあります。土塁が内側に続き、その上に倉庫群があり、その部分に礎石が残っていました。対応する礎石は今回整備でつくった礎石で、同じようなものを左右対称につくっています。こういう形で整備を進めています。ここもこの下を掘ると、一段階前に掘立柱式の門があった可能性もあるのですが、調査をそこまで及ぼすことができるかどうか難しいところです。

3 おわりに

ここにあげた写真が、現在調査が進行中あるいは整備に入った段階の山城です。もともと古い昭和三十年代に調査されたものは、すべて省略しました。これから鞠智城の整備に入っていきますが、現在発掘調査しているのはほとんど史跡指定のため、あるいはその後にくる整備のための調査です。鞠智城でも各地の指定状況などを大いに視察していただいて、ここだけがあまりに特殊な飛び離れたような整備にならないように、同じような歴史的背景で同じような時期にできたものですから、バランスなどもうまくとつていただきたいと思います。

